

都道府県別賞一等

「生命保険の大切さを痛感」

山口県 下松市立久保中学校 三学年

佐伯 隼一

僕は小学校に入学直後の新一年生の六月に初めて生命保険に関わりかねないケガをしました。それ以降大きなケガを負うことなく、五体満足で元気に生活出来ています。父は、「小さい頃に大きなケガを経験した人は、そのときの痛かった経験を忘れず、常に危険に対して気を付けているからだよ。」と教えてくれました。

僕の二つ下の弟は生まれてから大きなケガをすることなく、今まで過ごして来ました。しかし、今年六月、雨上がりの下校時に不運にも持っていた傘を足に引っ掛け、転倒してしまいました。転倒した際、受け身を上手く取れませんでした。そのため、利き手と反対の左手を道路についてしまい、中指、薬指、小指の三本を骨折する大ケガを負ってしまいました。弟の周囲には誰も居らず、泣きながら家に帰ってきたときのことを今も鮮明に覚えています。その指は通常と異なる方向に大きく折れ曲がり、見ている僕が気分を悪くしそうになるレベルのケガでした。兄として、両親に電話しましたが、大事なときに繋がらず、近所に住む祖父に連絡し病院に連れていってもらうことが出来ませんでした。

病院に駆けつけた母から父に電話があり、「町のかかりつけの病院では今回の骨折は状態が悪く、治せない。すぐに大きな病院を紹介するから、そちらで治療してもらえるように手配するから。」と言われたそうです。僕は父が話す言葉に息を飲み、静かに聞いていました。すぐに治してもらえるものとはばかり思っていました。そのため、とてもびっくりし、弟のことがとても心配になりました。

少し時間が経過し、蒸し暑く僕たちを照らしていた太陽が西に沈みかけた頃、母から再び電話で、「全身麻酔による緊急手術を行なうことになった。今晚は入院することになる。」と連絡があり、父は僕と妹を祖父母に預け、病院に飛んでいきました。母が夜遅くに戻ってくるまでの数時間はとても長く、僕たちにとって心臓に悪い時間でした。母から、「二時間半にわたる大手術は成功したよ。元気に目覚めてくれたよ。」と聞き、僕と妹のモヤモヤしていた心はパツと明るくなり、話しが弾んだことを覚えています。弟とは年齢が近く、他愛もないことでよく喧嘩もします。しかし、やっぱり血の繋がった唯一無二の兄弟だと再認識したことを覚えています。

次の日、学校には左手にギプスをし、三角巾で腕を固定した弟の姿がありま

第60回中学生作文コンクール

した。家で話すといつもと変わらない憎まれ口の弟でした。しかし、左手が使えないため、食事もトイレも入浴も全てがとても不自由そうでした。父と母は弟に、「みんなに心配をかけないように。小さなケガを続けると生命を脅かす大きなケガに繋がるリスクが高くなるから、気をつけなさい。」と繰り返し言っていました。

両親は僕たちが小学校に入学した際、登下校時に転んでケガをしたり、友達にケガをさせたりしてはいけないと万が一のことを考え、こども保険に加入しました。驚いたことに、学資準備のための保険にも医療保障が付与されていたこと、学校でも登下校を含む生徒のケガに対する医療保険に加入していたことを初めて知りました。そのため、今回の弟のケガもこれら多くの保険に守られていました。一つ一つは小さな掛け金ですが、大きな保障、安心が得られることが日々の生活でもとても大切であることを痛感した我が家の今年一番の出来事でした。

僕たちは現在、新型コロナウイルス第七波の再拡大や地球温暖化による災害リスクに直面しており、生命保険の手厚い保障が今後も重要であると考えます。

三年間、生命保険のことを調べ、その役割や制度について深く理解出来たことは今後の社会生活でも有用な知識になると考えます。